本因坊秀策読本

本因坊秀策　略年譜

文政12年	1829		広島県因島外浦町に生まれる。
天保 5年	1834	6歳	尾道にて、橋本吉兵衛と出会う。
天保 6年	1835	7歳	三原城主浅野忠敬公と初めて対局する。
			葆真和尚に囲碁を習う。
天保 8年	1837	9歳	江戸の本因坊家に弟子入りする。
天保10年	1839	11歳	初段の免許を受ける。
天保11年	1840	12歳	一度目の里帰り。忠敬公から5人扶持（給料）をもらう。
天保12年	1841	13歳	江戸の本因坊家に戻る。
			旅の途中、大阪で中川順節五段と対局し、全勝する。
			二段の免許をもらい、秀策と名乗るようになる。
天保13年	1842	14歳	三段の免許をもらう。
天保14年	1843	15歳	四段の免許をもらう。
弘化元年	1844	16歳	二度目の里帰り。
弘化 2年	1845	17歳	忠敬公に会い、増禄（給料を増額）してもらう。
弘化 3年	1846	18歳	江戸の本因坊家に戻る。
			旅の途中、大阪で井上幻庵因碩と対局する。
			「耳赤の一手」等、秀策の才能が知られる。
			五段の免許をもらう。
			本因坊家から次期当主になるよう頼まれる。
弘化 4年	1847	19歳	本因坊家の次期当主になることを承諾する。
嘉永元年	1848	20歳	本因坊家の次期当主になることが正式に決定。
			花と結婚する。
			六段の免許をもらう。
嘉永 2年	1849	21歳	初めて御城碁に参加する。
嘉永 3年	1850	22歳	三度目の里帰り。
安政 4年	1857	29歳	四度目（最後）の里帰り。
文久元年	1861	33歳	母が亡くなる。
文久 2年	1862	34歳	コレラににより、生涯を閉じる。
平成15年	2003	没 後	因島市名誉市民の称号を受ける。
平成16年	2004	没 後	日本棋院から表彰され、「囲碁殿堂」入り。

尾道市名誉市民

本因坊秀策

本因坊秀策は、1829年（文政12年5月5日）に広島県尾道市因島外浦に生まれ、江戸時代を代表する囲碁棋士になります。

秀策は、桑原　輪三、桑原　カメの夫婦の間に生まれ、子どもの時の名前は、桑原　虎次郎といいました。

昔は大人になる時や出世する時などに名前を変える習慣があり、虎次郎も何度か名前を変えることになりました。

さて、その虎次郎（秀策）ですが、虎次郎は、幼いころから囲碁の道具である碁石で遊ぶのが大好きな子どもでした。

虎次郎が三歳のころ、お父さんは、いたずらをした虎次郎を叱り、押し入れに閉じ込めました。初めは、暗闇が怖くて泣いていた虎次郎ですが、やがて泣き声が聞こえなくなりました。

不思議に思ったお父さんが押し入れを覗くと、虎次郎は

押し入れの中で碁石を並べて遊んでいました。

こういった虎次郎の行動から、お母さんは、虎次郎には囲碁の才能があると思い、囲碁を教えることになりました。

虎次郎が六歳になるころ、初めて家族以外の他人と囲碁の対局をすることになりました。

その日は、尾道でお祭りがあり、虎次郎はお父さんとお祭りの見物に行きました。

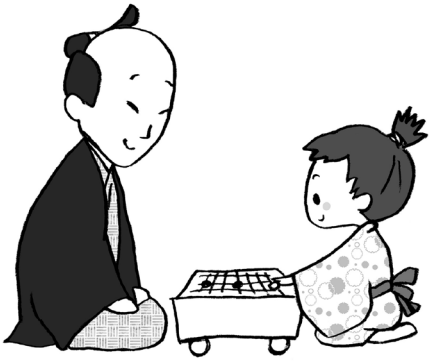
お父さんが仕事で訪れた渡橋　源兵衛の店で、店員と話をしていると、いつの間にか虎次郎がいなくなっていました。

お父さんは、お祭りのなか虎次郎を探し回りました。そして、ようやく見つけることが

できた虎次郎は、渡橋　源兵衛の店で、大人たちが囲碁の対局をしているのを見物していました。

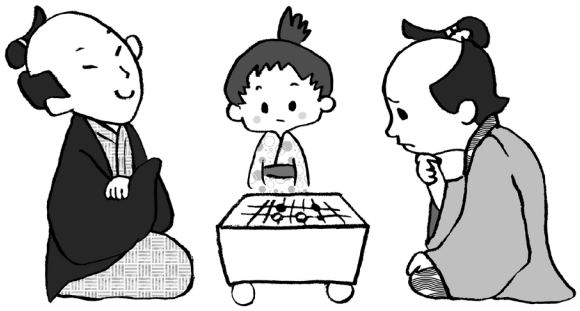
ほっとしたお父さんは、虎次郎をお祭りで行われている相撲の見物に誘いましたが、虎次郎は動こうとしませんでした。相撲が見たかったお父さんは、虎次郎を置いて相撲を見に行きました。

この時、虎次郎が見物していた囲碁を打っていた人物は、店の主人である渡橋　源兵衛と大商人である橋本　吉兵衛という人でした。吉兵衛は、せっかくのお祭りなのに、相撲よりも囲碁を見物する虎次郎に興味を持ったのか、六歳の虎次郎と囲碁を打つことにしました。



吉兵衛は虎次郎に九子のハンデ（対局の開始時に9個の石を置いた状態）をつけて囲碁を打ったところ、虎次郎は立派に戦うことができました。

吉兵衛は、まだ六歳にも関わらず、ちゃんと囲碁を打つことができる虎次郎の才能に感心し、相撲の見物から戻ってきた虎次郎のお父さんに



虎次郎の才能を褒めました。

虎次郎を褒められて喜んだお父さんは、虎次郎に囲碁を続けさせました。

それからちょうど一年後、お祭りの時に、また吉兵衛は虎次郎と囲碁を打つことになりました。今度の対局では、互先（ハンデなしの状態）で囲碁を打ったのに、吉兵衛は虎次郎に勝つことができませんでした。

一年前は九子のハンデをつけて、ようやく対局することができた相手を虎次郎はたった一年で追い抜いてしまいました。

やがて、虎次郎の実力は尾道で有名になり、「囲碁の神童」として噂になりました。虎次郎は、噂を聞いた大人たちから対局を申し込まれるようになりました。

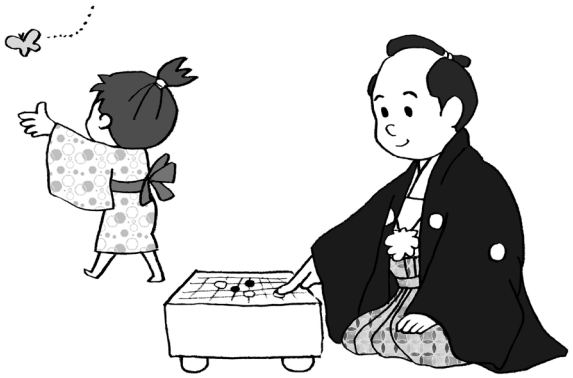
そして、虎次郎の噂は、三原城の出入り商人でもあった吉兵衛を通して、三原城のお殿様にまで伝わるようになりました。

当時の三原城のお殿様である浅野忠敬公は大の囲碁好きで、「囲碁の神童」として噂の虎次郎と囲碁を打ってみたくなり、虎次郎をお城に呼び、対局することとなりました。

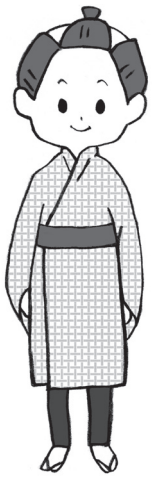
まだ幼かった虎次郎は、対局の時に忠敬公が手を止めて考えている間に席を立つなど、落ち着きがなく、お殿様に対して無礼なことをしましたが、忠敬公は怒りませんでした。

そして、対局が終わると、忠敬公は虎次郎の囲碁の強さに感心し、褒美に虎次郎が欲しがった将軍家から頂いた硯箱をあげました。

そうして虎次郎を気に入った忠敬公は、その後も虎次郎を城に呼んでは、一緒に囲碁を打つようになりました。当時、虎次郎が住んでいた因島から三原城までは遠かったため、虎次郎は、三原城に近かったお父さんの実家の安田家で暮らすようになり、名前を安田　栄斎に変えました。



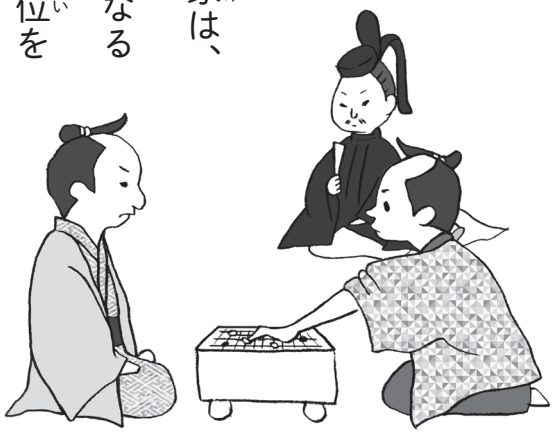
忠敬公は、栄斎（虎次郎）と囲碁を打つうちに、栄斎の囲碁の才能を伸ばそうと思いました。そして、芸州（広島）で囲碁が強いことで有名な葆真和尚に栄斎の囲碁の指導をお願いしました。

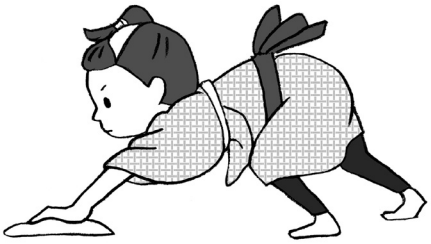


葆真和尚は忠敬公のお願いを聞き、栄斎に囲碁の指導をすることになりました。

葆真和尚に囲碁の指導を受けた栄斎の実力はみるみる上達し、九歳の時には、師である葆真和尚を超えてしまいました。そのため、芸州（広島）でこれ以上栄斎に囲碁を教えることは難しくなってきました。

秀策が生きた江戸時代の囲碁の世界では、囲碁の家元である本因坊・井上・林・安井の四家が囲碁の強さを競っていました。また、この四家は、囲碁棋士にとっての最高峰であり、江戸幕府の役職である「碁所」になるため、将軍様の目の前で囲碁の対局を行う御城碁などで「碁所」の地位を





争っていました。

この御城碁の囲碁に勝つため、家元である四家は、日本全国から囲碁の強い子どもを探し、いずれは御城碁に参加する強い棋士になるよう、自分の家に引き取って修業をさせていました。

忠敬公は、囲碁の才能に恵まれた栄斎を、囲碁の家元である本因坊家にお願いし、弟子入りさせてもらいました。

囲碁の家元へ弟子入りするということは、囲碁を教えてもらうだけではなく、お世話になっている本因坊家の家事やお客様の接待など、家のお手伝いもしなければなりません。また、九歳の子どもである栄斎が親元を離れ、江戸にある本因坊家で修業することは、大変つらいものでした。

栄斎が十歳の時、本因坊家で修業の日々を送っていたある日のこと、栄斎が兄弟子と対局している光景を見た当時の本因坊家の当主である本因坊丈和は、栄斎を「百五十年来の碁豪」であると言いました。これは、栄斎が百五十年前に碁聖と言われた本因坊道策に匹敵する才能があると

いう意味でした。

その後も本因坊家で修業を続けた栄斎は、十一歳の時に初段の免許をもらいました。

本因坊家のなかでも、わずか十一歳の若さで初段の免許をもらうことは珍しく、とても凄いことでした。

そのため、十二歳になった栄斎は、初段の免許をもらった事を故郷に報告しに行くことになりました。

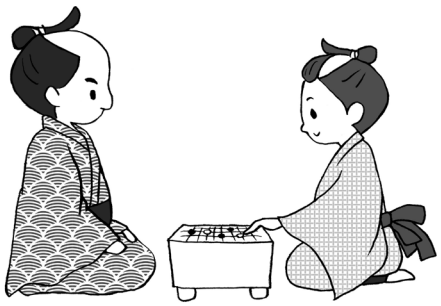
この報告を聞いた故郷の皆は大変喜びました。忠敬公にいたっては、お祝いに十二歳の栄斎にお給料を出すようになりました。

故郷へ戻り、一年ほど過ごした栄斎でしたが、本因坊家での修業のため、再び江戸にある本因坊家に向かうことになりました。

栄斎が十三歳の時、江戸に戻る途中、立ち寄った大阪で中川順節五段と対局することになりました。中川順節は、囲碁

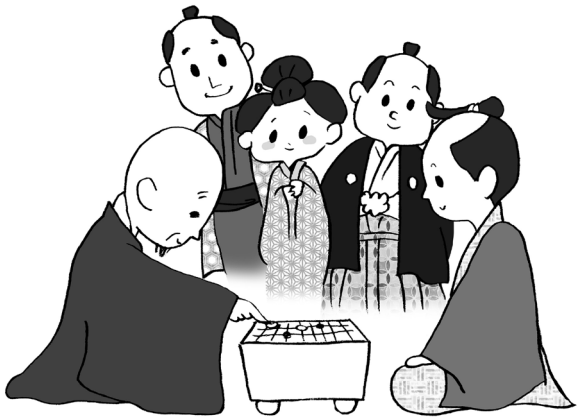
の家元である井上家で修業を積み、五段になった実力者でした。初段である栄斎とは4段の差があったため、当時の囲碁のルールにより、2子のハンデ（対局の開始時に2個の石を置いた状態）をもらって5回対局しましたが、栄斎の全勝となりました。

この対局が当時の本因坊家の当主である本因坊丈策に評価され、栄斎には二段の免許が与えられました。また、当主である丈策と次期当主である秀和の名前にちなんで、栄斎の名前を秀策に変えるよう、申しつけられました。



二段となった後も秀策（栄斎）は熱心に囲碁の修業を続け、十四歳で三段、十五歳で四段と驚異的な速さで成長を続けました。

秀策が十六歳の時、四年ぶりに故郷に帰ることになりました。前回の帰郷からわずか四年で四段となり、異例の速さで出世した秀策に故郷の皆は大変喜びました。この報告を喜んだ忠敬公は、秀策の給料を増やしました。

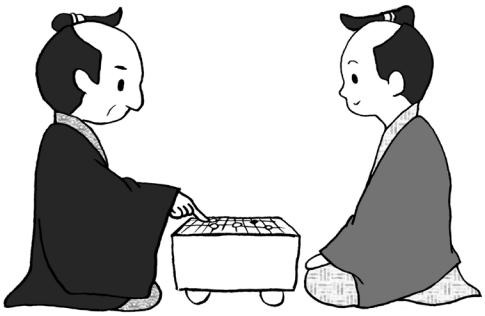


また、今回の帰郷では、かつての師である葆真和尚と囲碁を打つこととなりました。秀策にとっては、数年前に囲碁を教わった相手ですが、今回の対局では、葆真和尚に2子のハンデを与えての戦いとなり、結果は秀策の勝利となりました。

故郷に帰り、囲碁の勉強を続けていた秀策ですが、十八歳の時に本因坊家に向けて出発することとなりました。

秀策は、その旅の途中で再び大阪に立ち寄り、十三歳の時に対局した中川順節五段と対局することとなりました。この時の秀策と中川順節の段差は1段あったため、当時の囲碁のルールにより、秀策は黒石で始める先手を3回もらい、1回は後手である白石で戦ったところ、秀策の全勝となりました。

また、秀策は大阪でもう1人囲碁の強者と戦いました。その相手は、かつて囲碁の家元である井上家の当主だった井上幻庵因碩です。秀策が弟子入りしている本因坊家と同じく、囲碁の家元



に数えられる井上家で当主にまで上り詰めたことのある幻庵因碩は、秀策にとっては雲の上の相手と言えます。

当時の幻庵因碩は8段で、4段である秀策とは4段の差があったため、第1局は2子のハンデを置いて戦いました。

ところが、このハンデでは勝負にならず、秀策の圧倒的勝利となりました。

その後はハンデを少なくし、秀策の先手で4回戦ったところ、秀策の3回の勝利と1回の中止となりました。

この幻庵因碩との対局のなかで、第1局がとても有名になっています。

かつては、囲碁の家元の当主として日本一を争っていた幻庵因碩の囲碁は強く、幻庵因碩の優勢で勝負は進みましたが、碁盤のほぼ中心に打ち込んだ秀策の一手で全てが変わりました。

その一手を見た幻庵因碩は、耳まで赤くなるほど、顔を真っ赤にして動揺しました。幻庵因碩との勝敗を決した秀策の逆転の一手

は「耳赤の一手」と呼ばれるようになりました。

そして、秀策が里帰りから本因坊家に戻った時、大阪での対局がとても評価されました。秀策は、五段の免許をもらい、また本因坊の次期当主になるようお願いされました。

囲碁の家元である本因坊家の次期当主になるということは、やがては本因坊家の一番偉い人間になるというだけではなく、御城碁に参加し、日本最高峰の囲碁棋士達と囲碁を競える立場になるということでした。

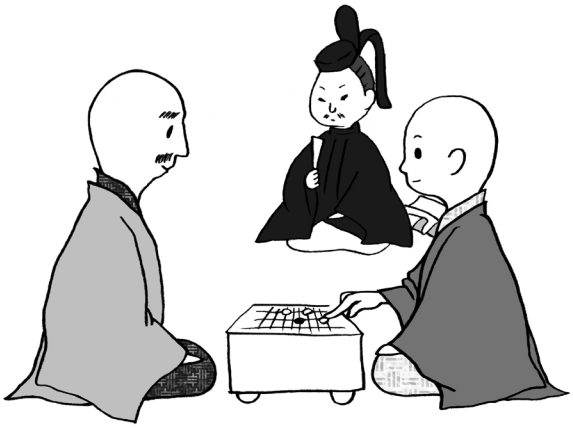
秀策は、三原城のお殿様である忠敬公から給料をもらい、お殿様にお仕えする立場であったため、初めはこのお願いを断りました。正式に本因坊家の人間になり、次期当主となるより、幼少の時から面倒を見てくれた忠敬公にこれからもお仕えし、故郷に帰ることを大事に思っていたからです。

しかし、本因坊家は才能のある秀策を後継者にすることを諦めることができず、忠敬公を先に説得して了解をもらいました。そして、忠敬公の了解をもらって秀策を説得したところ、秀策も

了解しました。

そして、秀策が二十歳の時、本因坊家の後継者として、江戸城で正式にお披露目されました。そして、これを機会に秀策は六段の免許をもらいました。また、この歳に師匠である丈和の娘の花と結婚することが決まりました。

本因坊家の後継者となったことで、御城碁に参加できる資格を手に入れた秀策は、二十一歳の時に初めて御城碁に参加することになりました。



御城碁で秀策が初めて戦った相手は、「天保の四傑」（天保時代を代表する4人の強い棋士）に数えられた安井算知七段でした。しかし、強敵の算知を相手にしても秀策は堅実に戦い、勝利しました。

そして、これより十二年間、秀策は日本最高峰の囲碁棋士が戦う御城碁において、無敗の十九連勝という大記録を打ち立てました。

秀策は囲碁の才能に恵まれ、また才能がありながらも努力を重ね

て、江戸時代の最強の棋士と言われるほどになりました。

囲碁棋士として素晴らしい活躍をしていた秀策ですが、秀策が三十三歳の時、故郷で暮らすお母さんが亡くなりました。

お母さんを亡くした秀策は、とても悲しみました。お母さんを思い、喪に服した秀策は肉や魚を食べることをやめました。

秀策がお母さんを亡くして翌年、秀策が暮らす江戸では、コレラが流行しました。

全国から弟子を集め、家人の多い本因坊家でもコレラに感染する人間がでてきました。

本因坊家の家人は、今や江戸を代表する棋士である秀策に感染したら大変と思い、秀策が病人を看病することを止めましたが、秀策は病人の看病を続けました。

この頃、お母さんを亡くし、肉や魚を食べない精進料理を食べていた秀策は、好物の椎茸ばかりを食べて腫物ができたり、体調を崩していました。

そして、家人の看病を続けるうち、秀策もコレラに感染してしまいました。秀策は、体調を崩していた影響もあって、コレラに感染してわずか1週間でその生涯を閉じます。三十四歳、文久二年（1862年）8月10日のことでした。

秀策が没した後、囲碁の歴史に名を残す秀策の偉業が称えられ、平成十五年（2003年）十一月七日、名誉市民の称号が与えられています。

そして、平成十六年（2004年）には、日本棋院が囲碁文化を咲かせた偉人を表彰する「囲碁殿堂」の初代表彰者の1人として選ばれ、殿堂入りしました。

秀策の遺品は、因島石切神社等から尾道市へ寄贈され、秀策が生まれた尾道市因島外浦町に建つ「本因坊秀策囲碁記念館」に展示されています。

参考文献　「碁聖本因坊秀策」樫本清人著（一般社団法人因島観光協会）
「碁聖本因坊秀策小伝」尾道市囲碁のまちづくり推進協議会

発　　刊　令和２年３月
囲碁のまちづくり推進協議会
尾道市企画財政部文化振興課内
〒722-8501　尾道市久保一丁目15-1
TEL（0848）20-7514

本因坊秀策生誕一九〇年記念事業　尾道市囲碁のまちづくり推進協議会